
零崎悔識の人間帰属

ベル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎悔識の人間帰属

【Nコード】

N8332X

【作者名】

ベル

【あらすじ】

中途半端な殺人鬼、零崎悔識【ぜろざきかいしき】、二律背反くパラレルマインド。彼はいつも人を殺した後、後悔をしていた。ある時、彼は決心した。中途半端な殺人鬼から人間に戻ることを。10年前、零崎化したときに逃げ出した桐条家の姉、桐条美鶴に会いに行く時、ペルソナ3ポータブルの世界は違うものになる。

基本、ペルソナ3ポータブルの原作に添って書いていきますが戯言、人間シリーズも時間的矛盾をなるべく少なくしキャラも出来るだけ壊さないよう書いていきます。さっき、短編として間違えて

投稿してしまったので再投稿です。

?月?日 ?曜日(前書き)

初めまして、ベルです。

初投稿です。なので、更新も遅いと思いますが完結はさせるともり
です。

よろしく願いします。

?月?日 ?曜日

{視点:なし}

深夜、青年は血だまりのなかに横たわっていた。

周りには、棺のようなオブジェがあり、空の色も何かおかしい。

青年は眼に涙をため、悔しそうに空に浮かぶ月をただ眺めることぐらいしか出来ない。

「姉…ん…ごめん…帰る…約束…守れ<ゴボ>」

<ビシヤ>

「…最後…雀躍【じゃくやく】…何か…残せ<ゴボ>」

<ビシヤ>

青年は、吐血しながらもつぶやき、何か残そうと考えた。

「スキュラ…あいつの…所に…」

<ガウン>

青年は最後の力を振り絞り、腰のホルスターにある銃を取りだし、自らの頭に向けて引き金を引いた。

？月？日 ？曜日（後書き）

どうでしょうか？

これは小説の後半の一部です。これに向けて、五月から順に書いていきます。

初めてなので、誤字や脱字、おかしいところやアドバイスなど、教えていただけたらうれしいです。

5月8日 金曜日(前書き)

4月はP3には欠かせない月ですが、悔識は、5月にSEESに入る
るので割愛します。

ちなみに、P3の主人公は女性で名前は神歌麻里【かみか まり】
です。

5月8日 金曜日

{視点：悔識}

「行くのか」

ドアを開けようと手をのばした時、後ろから零崎曲識、曲識兄さんが聞いてきた。

「行くよ。僕は中途半端な殺人鬼だからね。家賊で居続けるには人間の部分が多すぎる。まあ、しばらくは罪口姉妹のところに住ませてもらうよ。今まで、ありがとう」

そう、僕は零崎で殺人衝動も普通にあるのに罪悪感だけはなくなかった。だから、中途半端。

「そうか。だがレンやアス、他の家賊たち、それに私もだがお前をいつでも家賊と思っているぞ」

「僕もだよ。いつでも家賊だと思ってるよ。だから、なにかあったら言ってるね」

「ふむ、悪くない。饑別だ」

そう言って曲識兄さんはCDを二枚渡してくれた。

「これは？」

「一枚はお前が欲しいとっていた私の曲だ」

「欲しいって言ったの覚えててくれたんだ。ありがとう」

「もう一枚は、殺人衝動を和らげる音楽がはいってる。しかし、こっちは何度も使つと効き目が落ちてくるのであまり頻繁に使つなよ」

「わかった。本当に堪えきれなくなったら使つよ。本当にありがとう。それじゃ、またね」

そう言つて僕はピアノバークラッシュユクラシックを後にした。

10年前、零崎化する前の、流血ではなく血で繋がった姉さんに会いに行くために。

5月8日 金曜日(後書き)

どうでしたか？

曲識のキャラが難しいです。

また、誤字や脱字等ありましたら教えてくださるとありがたいです。

5月9日 土曜日 前編（前書き）

こんにちわ。ベルです。

「視点：」はその段落を誰の視点でかいているかということですが。

【】は人の名前などの読み方です。

一つの章の終わりに設定を書くつもりです。今回は5月10日が終わったら書くつもりですので悔識の普段の名前などもそこできま

5月9日 土曜日 前編

☆視点：なし

今、悔識【かいしき】は大きなボストンバックを自分の横の置き、背中にはギターケースを背負いながら駅のホームでモノレールを待っている。時刻は、11時45分過ぎ。昨日、<クラシユクラシツク>を出た後、飛行機を乗り、電車を使い、やっと巖戸台駅のホームに着いたのだ。

「まさか、4時間も電車に監禁されるとは。CDもらってて良かった。暇で死ぬところだったよ」

人身事故で電車が止まっていた。その事故は結構ひどく、なかなか後処理がうまくいかなかったのだ。運悪く、悔識はその電車に乗っていたのだ。

「こんなに、遅いと絶対、冬花【とうか】さん、寝てるよな」

悔識はどうしようかと悩んでいると、モノレールがきた。

「まあ、一日ぐらいどこかで月でも見ながら過ごそう。今日は満月だしね。」

そう言ってモノレールに乗り込んだ。

☆視点：美鶴【みつる】

「もうすぐ影時間だな。やはり、周辺を調べておくか」
前のようにイレギュラーのシャドウがいたら、倒さねばならないからな。

そう思い、窓の外の景色に眼をやる。

「今日は満月か」

そういえば、あいつは満月が好きだったな。

<カチツ>

「さて、影時間だな。作戦室に行くか」

お前はどこにいったんだ？。一輝【かずき】。

（視点：なし）

「なんだ、またやってたのか？」

作戦室に入るなり真田明彦【さなだあきひこ】は、眼を閉じ、ペルソナ、ペンテシレアを召喚し、周囲を索敵している桐条美鶴【きりじょうみつる】に声をかけた。

「まあな。敵はいつ来るとも限らない。」

「確かに、だが、タルタロスの外まで見張ろうなんて、そう簡単に出来るものか？」

真田がそういうと、桐条はペルソナを戻し、

「本音を言えば、力不足だな…私の“ペンテシレア”では、情報収集はこの辺りが限界かも知れない。」

そう言い、桐条は一瞬、申し訳なさそうな顔をした。しかし、すぐにいつもの表情に戻り、

「しかし、ペルソナの力というのは、想像していたより、だいぶ幅広いものらしい。何しろ、次々とペルソナを変えて使用する者も現

れたぐらいだ。“彼女”の能力には、特別なものを感じる。まだ覚醒して間も無いというのにな。」

「確かに、あんなヤツが現れるとは驚きだ。しかし、ペルソナを使うのは俺たち自身。同じように、その力を生かせるかは、アイツ次第だな。」

「まあ、そつだがな」

そう言つて、桐条はもう一度ペンテシレアを召喚し周囲を索敵した。

「んっ？、！いたぞ！だが、大きすぎる。それに、この反応は？！」

驚愕する桐条に、真田は少し嬉しそうな顔をして

「先月、出たのと同じデカイやつか！」

「ああ、そつだ。場所は巖戸台駅とポートアイランドをつなぐレールの上だ。っ！まずい！近くに象徴化してない人の反応もある！」

「なに！ペルソナ使いか？」

驚いた真田が少し興奮気味に聞いた。

「まだ、わからない。だが、このままでは奴らの餌食だ。」

「先に行く」

真田はそう言つて行くこうとするが

「待て、明彦！お前はまだ全快じゃないだろう？みんなを起こせ。私は先に行く。お前は理事長とここで待機だ」

「クツ、だが！一般人が」

「けが人など足手まといだ！。大丈夫、彼らは十分に戦えるさ。一般人のほうは私のペンテシレアでなんとかする」

「なっ！…わかった。いそいであいつらを起こす。無理するなよ」

真田は唇を噛み締めながら了承の意を伝えた。それを聞き桐条は作戦室を後にした。

〔視点：麻里【まり】〕

「何事ですか」

作戦室に入ると同時に私は聞いた。

岳羽ゆかり【たけばゆかり】、伊織順平【いおりじゅんぺい】もほぼ同時に部屋に来た。

真田先輩が興奮気味に言った。

「先月みたいなデカイやつが現れた。しかも、近くには象徴化していない人もいる。今、美鶴が先行して巖戸台駅に向かっている。お前も早く向かえ」

「それって、ペルソナ使いつすか？」

順平が驚きを隠さずに言う。

「まだ、わからん。しかし、このままではまずい。俺も出たいんだ」

が、美鶴に止められてしまった。だから、頼むぞ」

真田先輩は悔しそうに言った。

「任せてください。オレっちが真田先輩の分までがんばります」

順平は得意気で言っている。ゆかりはそんな順平を見て呆れている。

「神歌【かみか】、いつも通り現場での指揮を頼む」

真田先輩は順平を見てそのあと私に向かって言ってきた。

「わかりました。じゃ、行く」

私は答えながらも順平の悔しそうな顔を見た。

真田先輩も順平に「よろしく頼む」くらい言えばいいのに。空気を読めない人だ。

そして作戦室を出ようとしたとき

「なんで、あいつばっかなんだよ」

という順平の呟きを聞いた。

5月9日 土曜日 前編（後書き）

いかがでしたか？

後編は戦闘を書きます。下手だと思いますが、がんばって書くのでよろしくお願いします。また、誤字、脱字等ありましたら教えてください。ただけたら嬉しいです。

5月9日 土曜日 中編（前書き）

こんにちは、ベルです。

少こし、遅れました。これから先、さらに遅れることがあるとおもいますが、月一回は投稿するつもりです。

前の話で悔識の服装や見た目を書くのを忘れてました。なので、設定で全部書きたいと思います。

5月9日 土曜日 中編

〔視点：美鶴〕

しかし、一体誰だ？月光館学園の生徒は一通り調べた。転校生なのか？

だが、そうなると変だ。転校の届け出は無かったはずだ。

まあ、今は考えても仕方が無い。作戦が終われば直接聞くだけだ。

「とにかく、急ごう」

奴らの餌食になる前に。すこし取りずらいがしかたがない。左手をハンドルから離し、銃の形をした召喚機をとりだした。

「ペンテシレア！」

<ガウン>

影時間に一発の銃声とバイクの音だけが響いていく。

〔視点：麻里〕

やっと着いた。既に巖戸台駅の前に桐条先輩がいる。

「どういう状況ですか？」

「シャドウは？」

「一般人は？」

私と同時に順平、ゆかりが続けて質問する。

「今のところは大丈夫だ。幸いにも大型のシャドウは先頭について、

一般人は二両目にいる。ほかのシャドウはまだいないみたいだ」

桐条先輩はペンテシレアを召喚し索敵をしているみたいだ。

「みんなには線路を歩いて行ってもらおう。そしてモノレールに乗り移り次第、一人が一般人の保護。他の二人は、避難が終わるまで時間稼ぎだ。避難が終わり次第合流し殲滅だ」

桐条先輩は作戦を説明する。しかし、

「ちよっ！それって困ってことじゃないですか！。危険すぎます。それに、保護の方も一人では安全とは言いきれません。」

ゆかりが怒ったように反論する。確かに私もそう思う。

「私も反対です。ここは、全員で避難を優先すべきです。もしくは、桐条先輩も同行し二人二人で分けるべきです」

反論すると桐条先輩は苦しそうに顔をゆがめ、

「すまないが、それは出来ない。私はここで、奴らに一般人が見つからないように攪乱しなければ今すぐにでもばれてしまう。」

桐条先輩、だから少し苦しそうなんだ。

「それに、もし一旦乗り込んでやつが興奮してモノレールを壊してみろ。影時間は多くの者にとっては無いものだ。それでは、矛盾が生じてしまう」

確かに桐条先輩の言うことももっともだ。すると、

「まつ、要は倒してしかも一般人を保護すりゃいいんでしょ。ゆかりっち、それに麻里っちも怖いならオレが一人で時間稼ぎをするぜ」と順平が簡単なことみたいな顔で言う。本当に考えてるのかな。けど、おかげで頭が冷えた。かなり不安だけど確かにこの作戦しかない。

「わかりました。じゃ、順平とわたしが時間稼ぎでゆかりは保護をお願いね。頼りにしてるよ、順平」

「おう。大船に乗ったつもりでいろよ」

とても得意気にいう順平。

「えっ！本気で言ってるの？」

信じられないみたいな顔をするゆかり。

「本気で言ってるよ。それに、こうして話してる間にも桐条先輩はだんだん疲れていく。てか、先輩のことだからバイクに乗りながらもずつと攪乱してたんでしょ。ならあんまり余力はないだろうし」

「鋭いな」

桐条先輩が驚いたように呟いた。本当だったの！ちなみに、先輩のバイクは400ccのゼファーだ。

「もし、解けたらそれこそ終わりだよ。それなら、早く行って作戦を実行したほうがいい」

「っ！…でも、バイクに乗りながら攪乱できるなら歩きながらも出来るんじゃない…」

「いや、先輩はたぶん一般人に会うまでは私たちも見つからないようにしてくれるから、より一層集中が必要になると思う。でしょ、先輩」

「君は本当に鋭いな」

「…わかったわよ。私は保護を優先する。でも、二人とも絶対に死なないですよ」

ゆかりはわかってくれたみたいだ。よかった。

「すまない。こんな危険な作戦に巻き込んで」

桐条先輩は申し訳なさそうな顔をして私たち三人に向かって言った。その顔にはずいぶん疲労が見える。本当にあまり時間はなさそうだ。

「大丈夫です。じゃ、行こ」

そうして私たち三人は駅に向かった。

桐条美鶴がバイクで向かっていた時。

〔視点：悔識〕

眼を閉じ曲織兄さんのCDを聞いていると再生が止まった。

「ん？あゝしまった。12時だ。ばたばたしてて忘れてたよ」

本当になんなんだろう、この良くわからない現象は。他の家賊たちは誰もこのことを知らないし。

てか、なんで他の人は棺みたいになるんだろう？

「あゝあ。また監禁かよ。しかも今度はモノレール。本当についてない。まあ、満月が見えるから、まだマシか」

この現象中の満月もなかないものだ。

「ん？」

なにかいるのか？いつもは何もないのに。

「まあ、ほっておこう。襲ってくる気はないみたいだしね。まあ、嫌な予感がするけどあくまでも予感だからね」

もう、僕は零崎ではないんだ。人を殺したくもないしね。

それに、気配もなんだか薄い。

でも。ちょうど良かった。この間に得物のていれだけはしとくか。

「あの二人、整備してないと怒るしな」

右横のギターケースから得物を取り出した。

〔視点：麻里〕

「これ、だよな」

ゆかりが恐る恐るモノレールに近づきながら言った。

<ピピピッ>

「三人とも…聞こえるか？。敵…君らの目…前…モノレール…中だ。一般人は…二両目に…。幸いにも…気づかれて…いない。急いで…向かって…くれ。ただ、今から…攪乱を…強くする。だから…いつものような…サポート…出来…ない。いつも以上に…慎重に…進んで…くれ」

「っ！…わかりました。先輩も無理しないでください」

桐条先輩の通信に答えるゆかり。

桐条先輩かなりキツそうだ。本当に危ないかもしれない。ゆかりも気づいたようだ。

「早く、行こう」

私はみんなを促し、乗り込んだ。

乗り込むとき、順平を先に行かせたのはいうまでもない。本当にこんなときまで。しっかりしてよ。

☆視点…なし☆

巖戸台駅前。

桐条は已然、攪乱をしている。しかし、もう限界みたいだ。何とか立っているのがやっとのようだ。

そのころ、三人はモノレールに乗り込んだ。

「先輩大丈夫かな？さっきかなりキツそうだったけど」

岳羽が呟いた。

「先輩ががんばってくれてる間に早く一般人を探そう」

神歌はみんなに向かって言った。

「なぐに、オレっちがいるんだ。大丈夫だよ」

伊織は自信満々で言った。

当然、二人は完璧無視。

「なんだよ。冗談だって。オレは二人の緊張を解こうと…」

「はい、無駄口たたかないで周囲を警戒」

弁解をはかる伊織に神歌は言う。

伊織は顔を俯けていた。

そうこうしているうちに八両目についたとき、急にシャドウが天井から降りてきた。

しかし、シャドウはなにもすることなく逃げていった。

「あのヤロ、逃がすか！」

「待つて！」

追いかけてよとした伊織を神歌が呼びかける。

「っ！、なんでだよ！。早く追いかけないと一般人が危ないだろうが！」

「なにか様子がおかしい。もしかしたら、はじめから私たちしかね

らってないのかも。そうになると、一般人の存在自体が敵の作戦かも」

「…いちいち、お前の許可なんかいらねーんだよ!」

「あ、コラ、順平!？」

岳羽が止めるも伊織は走って行ってしまった。

「…っ！ゆかり危ない!」

すると、岳羽と神歌の間にシャドウが二体、天井から降りてきた。

<ガウン>

「オルフェウス、お願い!」

神歌は瞬時に召喚機でペルソナを召喚する。

オルフェウスは琴を二体同時に偽りの聖典に叩きつける。しかし、
一体は琴を避け、もう一体は直撃するも消えることなく、浮かんで
いる。

その間に <ガウン> 岳羽が召喚していた。

「イオ!、やつらを吹き飛ばして!」

イオのガルによる風の刃が二体を襲う。一体は消え去り、もう一体
は床に落ちてきた。その時に、

「はああ!」

神歌は飛び上がった、薙刀で突き刺した。そして、残りの一体も消
滅した。

「やつぱり、畏かな?」

神歌が呟いたそのとき、

<シュー、ガン>

「ちょー！、何いまの音？」

岳羽がびっくりした声をあげる。神歌は後ろを見ると

「あっ！、ドアが閉まってる！」

「うそ！？、じゃあ、これは罠？」

「いや、それなら乗り込んだ瞬間に閉めるはずだよ。…！」

「てっことは…！」

『桐条先輩！』

二人は同時にその答えにいきついた。

<ピピピッ>

神歌は桐条に通信を試みるも出ない。それを見ていた岳羽は

「ヤバイ、どうしよう？麻里」

「こうなったら、一般人を保護しながら倒すしかない。まずは、順平と合流しよ」

「……………そうするしかないよね。アイツこんなときに罠にはまらないでよ」

長考のあと、岳羽はうなずいた。

伊織がシャドウを追いかける少し前。

〔視点：悔識〕

「それにしても暇だな。もうすることないよ」

得物の手入れも終わったし、こんなことなら、本でも持っておくべきだった。

ん？ 気配がさつきよりもはっきりしてる。それに、この気配は本当に人か？

いや、人もいくらか混じってるな。

「一応、警戒だけはしておくか」

そう言っつて、ギターケースをあけ取り出すほうを決める。

「どっちにしようかな……やっぱり、疲れないほうにしよう」

すると、ひとつ後ろの車両からウィッグみたいな飛行物体がやってきた。

「せつかちだね、嫌いだよ」

まだ、得物も出してないのに。

てかなんだあの飛行物体？ まあ、人じゃなくてよかった。

飛行物体は急に僕の足元を凍らせた。

「っ！……びっくりするようなことするね」

まあ、砕くからいいか。それに殺人衝動もすこし溜まってるとも

強そうな気配だね。念のためあっちも持っていこう」

そう言っつて、零崎は床に倒れているギターケースからもう一つの得物を取り出した。

5月9日 土曜日 中編（後書き）

どうでしたか？

戦闘シーンは下手です。また、キャラの視点で書くのが難しいです。アドバースがあれば教えていただけたら嬉しいです。

今回も誤字や脱字等ありましたらよろしくお願いします。

5月9日 土曜日 後編（前書き）

こんにちは、ベルです。

予想外に長くなってしまい、前編、中編、後編の長さのバランスがわるくなってしまいました。すいません。

そして、こんな拙い小説をお気に入り登録してくださった方々、また登録まではいかなくとも読んでくださった方々、本当にありがとうございます。がんばって書かせていただきます。

5月9日 土曜日 後編

（視点：なし）

悔識が囁くティアラを倒したとき、伊織はシャドウを追っていた。4両目に入ったとき、天井からテーブルの足が手のような形のシャドウ、笑うテーブルと十字架の形をした炎と氷のバランサーが現れ、伊織の後ろに着地した。

「えっ…ヤバっ！ヘルメ…」 <カン>

伊織が背後のシャドウに気づき召喚しようとしたとき、前を飛んでいたシャドウ、偽りの聖典が伊織の召喚機をはじく。

「くそっ！邪魔するな！」

伊織は手に持っていた太刀で偽りの聖典を切り伏せる。しかし、そうするべきではなかった。

笑うテーブルと炎と氷のバランサーが背後からそれぞれアギとブフを放つ。

伊織はそれに気づくも既に遅く、二つとも直撃した。

「ぐはっ！」

伊織はたまらずうめき声をあげ床にたたきつけられる。

二体は止めをさそうとそれぞれが魔法を放つ体制をとる。

そのとき、魔法を放とうとしていた炎と氷のバランサーを一本の矢が貫いた。

「順平！」

岳羽が呼びかけながら走ってくる。
その後ろで神歌が召喚した。

<ガウン>

「オルフェウス、焼き尽くして！」

オルフェウスが琴を奏すると笑うテーブルは燃え出し消滅した。
そして、神歌は矢に貫かれたままの炎と氷のバランスーに薙刀を振るう。

<ザシユ>

炎と氷のバランスーも消滅した。

「つたく、言わんこつちやない！一人で勝手するからよ、もう。で、大丈夫？」

岳羽が回復魔法、ディアをかけながら心配そうに伊織にきく。

「ああ…、んだよ、オレ一人でいけたっつーの」

「ちよつと、あんたねえ」

「まあまあ、いいじゃない、一応無事だったんだし。はい」

二人をなだめながら伊織に落ちていた召喚機をわたす神歌。
伊織がお礼を言おうとしたとき、モノレールが急に動きだした。

「ちよつ！、今度はなんなのよ」

「なんか、動き出したぞ！」

「…確認なんだけど、この時間って、機械、止まるよね？」

神歌が青い顔をして二人にきく。

「そうだけど、なんでこのモノレールは動いてるの？」

岳羽が不思議そうにきく。

「このモノレールはたぶんシャドウが動かしてるから動くんじゃない？。けど、他のは…止まってる…よね？」

「そりゃそうだろう…。って！まさか！」

「このままいけば、ぶつかる！」

「…だよな」

岳羽、伊織が見事にはもり、神歌はあいかわらず青い顔をしながら呟いた。

「だよな、じゃっねーって。ヤバイ、どうすんだよ。このままじゃ一般人の保護どころじゃねーぞ！」

「ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ、本当でヤバイ！」

二人は慌てふためいている。その間にも、モノレールはどんどん加速していく。

「早く、先頭車に行つて止めないと。一般人はこの先にいるはずだから途中で保護しよう」

立ち直つた神歌はそう言つと駆け出した。

「ちょ！待つてよう」

岳羽が後を追う。

伊織をそれを見て、

「やっぱ、アイツにはかなわねえのか？」

と呟いてから後を追つた。

伊織に神歌、岳羽が追いついた時、

悔識は先頭車に耳につけていたイヤホンをとりながら、先頭車に入つた。

「なんか、目のやりばに困る状況になつてるな。双識兄さんなら喜びそうだけどね」

悔識の目の前には、巨大でM字開脚をし上半身裸で髪がものすごく長い女のようなシャドウ、プリーステスの前に立っていた。

左肩に狂気感慨を担ぎ、左腰のベルトには、日本刀のような柄が見える。ただし、なぜか鐳の所に銃のトリガーのようなものがつき、柄の端にはケータイストラップよりすこし長めの鎖が二本ついている。

「人に似てるけど、人じゃないな。それなら、壊していいよね」

悔識がそう呟いたとき、モノレールが動きだした。

「この現象中に機械が動いた！これもお前の仕業かな？」

悔識はそう呟いた瞬間に動いた。

プリーステスが髪で悔識を捕らえようとしたのだ。

悔識はあせることなく、右にステップを踏みプリーステスの足の前に飛ぶ。

「さっきのやつといい、なんでこうせつかちなんだよ」

悔識は愚痴をこぼしながらもプリーステスの足に狂気感慨を振り下ろす。しかし、プリーステスは全くこたえない。

「そうこなくっちゃ。すこしは楽しめそうだね」

悔識は笑みを浮かべながら飛び上がり、プリーステスの顔に狂気感慨を振り下ろそうとするがプリーステスは氷の魔法、ブフを放ち、壁をつくる。

「そんなもの、意味無いよ！」

悔識は氷など気にもとめずふりおろす。しかし、氷は砕けず逆にはじかれてしまい、その隙にプリーステスの髪につかまってしまった。

「ぐっ、さっきのやつより、氷もかたいのか」

髪で締め上げられ身動きが取れないにもかかわらず、悔識は嬉しそうに言った。

そして左手の狂気感慨をほうりなげ、自身を拘束していた髪の上に

落とし、髪をひきちぎり着地する。

狂気感慨はそのまま、床に突き刺さらずバウンドして転がり床にはヒビが出来た。

「これじゃあ、あの氷は壊せないか。しょうがない、久々に、こつちを使うとしよう」

そう言うと悔識は姿勢を低くし腰の日本刀、自己嫌悪くヘイトマイセルフの鞘を左手で固定し、右手で引き抜くと同時にトリガーを引いた。瞬間、悔識の姿がぶれただけで、その場から動いてもいない。

しかし、プリーステスの右腕がポトリと落ち、消滅した。

「~~~~~！」

プリーステスはこの世のものとは思えない声を出し、髪で切られたところをかばっている。

「頭を…狙ったのに、なんて…反射神経だ」

悔識は何故か苦しそうに呟き、床に片ひざをついた。

よく見ると、自己嫌悪を握っていた右手や足など、体のいたるところが火傷のようになっている。

「まい…ったね、どう…しょう…」

<ガウン>

突然、プリーステスの体が燃え出した。

「！」

「君、大丈夫？ゆかり、順平、奴の気をひいて！」

「おう！来い、ヘルメス！」

「わかった。お願い、イオ！」

<<ガウン>>

先頭車に來た神歌が二人に指示を出す。

二人はほぼ同時に召喚した。

最初にプリーステスにイオの放ったガルが直撃する。

それに続いて、ヘルメスはプリーステスに向かってスラッシュを放つが、かするだけだった。

二人がプリーステスの相手をしているとき、

<ガウン>

「ピクシー、お願い、傷を治して」

召喚されたピクシーは悔識の周りを一周まわる。
すると、悔識の傷がみるみる治っていく。

「っ！すごいな。ありがとう。あんたたちは？それに、その飛んでるの何？」

「ごめん、説明は後。それより、大丈夫？」

「なんとかね。助かったよ」

「よかった。危ないから、後ろの車両に行つてて」

「それはできないね。ちゃんと、アイツにお返ししなきゃ気がすまないし、落し物もあるんだ」

「落し物？」

悔識は床に転がっている狂気感慨を指差した。

「わかった。とってくるから待ってて」

神歌は狂気感慨に向かって走りだした。

「無理だと思っけどね」

悔識が呟いたとき、神歌は狂気感慨を拾おうとするが全く持ち上がらない。

「なにこれ、おもー！」

「無理すると、腰、碎けるよ」

悔識はそう言うところ床の狂気感慨を左手で持ち上げる。

「うそ！片手で持、きゃあ！」

「危ない！」

神歌が驚き、悔識に尋ねようとしたとき急に悔識が神歌の手をつかみ、引き寄せる。

神歌が立っていたところにプリーステスのプフが放たれていた。

「っ！みんな！」

気がづくのと伊織、岳羽が徐々に押されだしている。

<ガウン>

「オルフェウス、奴を燃やして」

プリーステスは琴を奏でようとしていたオルフェウスを左手で吹き飛ばした。

「きゃあ！」

オルフェウスが吹き飛ばすと神歌も同じように吹き飛び壁に激突し、そのショックで意識をなくした。

「神歌！」「麻里！」「おい、大丈夫か！」

伊織、岳羽、悔識がほぼ同時に振り返り神歌に呼びかける。
しかし、プリーステスはその隙を逃さず、伊織を髪で、岳羽を左手でつかむ。しかし、悔識だけはバックステップで髪をかわす。

「ぐあっ！」「っ！」「っ！」

伊織、岳羽は堪らず呻き声をもらす。

「その二人を離せ！」

悔識は叫びとともに飛び出し、プリーステスの左手にむかって跳躍し狂気感慨を振り下ろそうとするも、足で弾き飛ばされ、神歌の近くに吹き飛ばす。

「かはっ！」

悔識はえづきながら床にたたきつけられ、狂気感慨から手を離してしまった。

「逃げろ！」「逃げて！」

伊織、岳羽が拘束されながらも叫ぶ。

「くそっ！」

立ち上がり際に足に何かがあたった。

<カラン>

悔識はそれを拾う。

「なんだ、これ？銃？」

〔視点：悔識〕

「なんだ、これ？銃？」

なんで、高校の制服着た奴がこんなもの持つてるんだ？

いや、これは本物じゃない。でも、なんなんだ、この存在感？

そういえば、あの三人、なにか叫びながら自分の頭にむかってトリガーを引いてたな。

「っ！」

なんだ？頭に声が。

” 我は汝、汝は我。汝、今、扉を開く時なり”
扉ってなんだ。いや、なんか、知ってるような気がする。

「危ない！」

まったく、人が考えごとしてるのに邪魔だな。

視点：なし

「うつ」

意識を取り戻した神歌の目に飛び込んできたのは召喚機を手に立つ一般人とそれを捕らえようとするプリーステスであった。

「危ない！」

悔識を意に介さず、召喚機を見て立っている。

しかし、プリーステスの髪が届く前に悔識はそれに気づき横に飛んで避ける。

着地した悔識はうつすらと笑みを浮かべ、こめかみに召喚機を向け呟いた。

「ペ・ル・ソ・ナ」

<ガウン>

「うそ！召喚…したの」

神歌は目を見開き、伊織、岳羽は声もでないほど驚いていた。

悔識の目の前に、上半身は美しい女性、下半身は魚、上半身と下半身の継ぎ目には六つの狼の前半身が生えている。アルカナは節制、

スキュラが顕現した。
スキュラは悔識に緑色の光、動きが早くなる魔法スカクジャをかける。

スキュラがスカクジャをかけた瞬間、悔識は自己嫌悪を引き抜いたように見えたがまた、姿がぶれたただけであった。

瞬間、プリーステスの首が斬られ、頭が床に落ちる前に全身が消滅した。

同時に伊織、岳羽は開放され、悔識は片ひざをついて苦しそうにしている。

「イオ！」

<ガウン>

岳羽が召喚し悔識にディアをかける。

「ふう〜。ありがとう、楽になったよ」

悔識はお礼を言って立ちあがろうとした瞬間、

「おい！、止まってねーぞ」

伊織が気づき、叫ぶ。

「キヤアアツ！！」

岳羽は目をつぶって叫んでいる。

「うそっ！！」

悔識が立ち上がって走りだそうしたとき、既に神歌は運転席に向か

って走り、適当にレバーを引いた。
<キィ〜っ!>

前のモノレールの少し手前で止まった。

伊織、岳羽はおそろるおそろる目をあけ、悔識は。

「と…止まった?」

「止まってる…みたい」

「助かった〜」

伊織、岳羽、悔識が安堵の声をあげる。

「や、やば、私ヒザ笑ってる…」

「僕は腰が抜けた…」

「あーっ、あーもうっ、メチャクチャ、ヤな汗かいたっっーの…」

三人は気の抜けたことを言っていると、運転席から神歌が笑みをうかべながら歩いてきた。

「みんな、大丈夫?」

「なんとかね。てか麻里、ブレーキよくわかったね?」

「女の勘かな」

「女の勘って、そういうトコロに働かないでしょ…」

「ああ…いや、もう何でも」

神歌に岳羽、伊織が返答する。すると、神歌が腰が抜け座り込んでいる悔識に手をかしながら言った。

「大丈夫、君、名前は？あと、あの重たい鉄板はなに？」

「そうだ。そういや、お前、首切り落としたとき、なにやったんだ？気がついたら首が落ちてたぞ」

「てか、君、召喚したよね」

神歌、伊織、岳羽が悔識に質問をする。

「名前は桐崎一輝【きりざき かずき】、今度、月光館学園の一年生に転校してきました。今、こっちに着いたばっかなんだ。そうそう、はい、これ。勝手に使ったけど、いいよね」

そう言い悔識は神歌に召喚機を渡す。

「ありがと。で、首落としたときは何やったの」

「あれは、なんていうか…その…なんだろうね」

「んなんで通るとおもってたのか？」

伊織の返しに悔識は

「通らないよね。え〜と」

悔識がなんていうか考えていると突然、

<ピ。ピ。ピッ>

通信機が鳴った。

「おい、無事か！」

「桐条先輩、今、終わりました。全員無事ですが、床にヒビが入ってる事と、前のモノレールにかなり近い位置までできてます。先輩こそ大丈夫ですか？途中、通信できませんでしたけど」

「すまない。気を失っていた。…っ！」

「何ですか！、まだ、シャドウが…」

「いや、シャドウの反応はもうない。安心してくれ。だが、ペルソナ使用の反応が四人に増えている。どういうことだ？」

「それが、例の一般人、名前は桐崎一輝って言うんですが、その人がペルソナを召喚したんです」

「なに！本当か？」

「はい、本当です。しかも、大型のシャドウに止めをさしたのも彼です」

「そうか、その彼に、桐崎に変わってくれるか？」

「はい、わかりました。桐崎君、桐条先輩が変わってって」

「えっ、…うん、わかった」

「？」

悔識は何故か、緊張しながら通信機をつける。

「私は桐条美鶴。詳しい事情を聞きたいだろうが、今日はこんな時間だ。明日、直接会って話したい。夜8時に月光館学園の特別寮に来てほしいのだが、どうだろうか？」

「それはかまいませんが、僕は今日、こちら辺に来たばかりなのでどこにあるかわからないんですけど」

「わかった。携帯はもっているか？」

「はい、持ってます」

「よし、なら今から言う番号を登録しておいてくれ。そして明日、夜7時半に電話をかけてくれ。寮までナビゲートしよう」

「わかりました。少し待ってくださいね。メモ出しますんで……」

悔識は二両目にあるポストンバッグからシャーペンとなにかのチラシを取り出した。

「いいですよ」

「090 - **** - ****だ」

「090 - **** - ****ですね」

「そうだ。今回は巻き込んで済まなかった。怪我はないか？」

「はい、治してもらいましたから」

「そうか、ところで、どこかで私と会ったことはないか？」

「っ…！…ありませんよ。初対面…だと思います」

「…そうか、すまない、変なことをきいたな。忘れてくれ。それでは、明日」

「わかりました」

そう言って神歌に通信機を渡す。

「はい、神歌さん」

「えっ…なんで、私の名前知ってるの？」

「さっき彼が叫んでたからね」

「そうなんだ。あつ、桐条先輩、これで戻ってもいいですか？」

「ああ、シャドウの反応はもうない。安心して戻ってくれ」

「わかりました」

「今回は、バックアップが至らなかった。済まない…私の力不足だ」

「そんな、先輩は必死に桐崎君を守ってたんですから、しかたないですよ。気にしないでください。それに、私たちも桐崎君を危ないめに遭わせてしまったし……」

「……すまない、気をつかわせたな。それでは、戻ってくれ。あと分かっているとと思うが、行きと同じように巖戸台駅に歩いて戻ってこいよ。君らはお金を持ってないだろう」

「えっ、それって、もしかして……」

「それではな」

<ピッ>

「あっ、先輩！……うそでしょう」

神歌がまたもや青い顔をして呟く。

「どうかした？」

岳羽が不思議そうに尋ねる。

「また確認だけど、このモノレールって、猛スピードで走ったよね？」

「おいおい、大丈夫か？あんな体験して記憶がとんじまったのか？」

「さっき、桐条先輩が歩いて、巖戸台駅に戻ってこいって……言ってたん……だけ……」

伊織、岳羽は次第に顔を青くしていく。すると、悔識が

「もう、辰巳ポートアイランドが見えてるけど…」

「何十キロ歩けって言うんだよ。先輩の鬼！」

「あたし、絶対無理！」

「私も無理だよ。ヘトヘトだよ」

三人はその場に座り込んでしまった。
すると、悔識がある打開策は言う。

「辰巳ポートアイランドまで歩いて行ってこの現象が終わったら、
反対方面のモノレールに乗ればいいんじゃないですか？」

「私たち、今、お金持ってないのよ」

「なんなら、貸しましょうか？皆さんが特別寮？に住んでるなら明
日返してもらえればいいですし。」

「本当？」

「やたー。走らなくて済む。一輝、お前、いい奴だな」

「あなた、ほんとになれなれしいわね。少しは相手の迷惑も考えな
よ。でも、ほんとにいいの？」

神歌、伊織、岳羽がそれぞれ、顔を明るくしながら言う。

「いいですよ。ただ、名前教えてくださいな。神歌さん以外、わか

らないので」

悔識がそう言うと、神歌、伊織、岳羽が笑みを浮かべながら自己紹介をする。

「そういえば、まだ自己紹介してなかったね。私は神歌麻里。月光館学園の二年生なの。明日さっきにしたか教えてね、桐崎君。」

「オレは伊織順平。ジュンペーでいいぜ。同じく、月光館学園の二年生だ。よろしくな。てか、後でオレにも先輩の番号教えてくれよな」

「はあく、あんたねえ。私は、岳羽ゆかり。私も同じ月光館学園の二年生です。さっきは助けてくれてありがとね」

「よろしくお願いします」

これが、零崎悔識とSEESとの顔あわせであった。

神歌と通信を終えた後、

〔視点：美鶴〕

今回は私の力不足だな。全員が無事だったのは奇跡だな。

それにしても、桐崎一輝と言ったか。似ているな。直接あったばかりでもないのに、そう思うとは。名前まで同じときている。

「ふつ。思い過ごししか。それより、理事長に報告せねばな」

〔視点：悔識〕

僕は三人にお金をかして別れた後、モノレールが辰巳ポートアイランドの次、北辰巳ポートアイランドでおりて、改札口を出て、冬花さん家にむかって道を歩いている。

まさか、この町に来てその日に姉さんと話すとはね。しかも、携帯の番号まで手にはいるなんてね。

でも、弟だ、なんて言えないよね。第一、零崎のこと、どう説明すればいいんだ。

しばらくは明かせそうもないな。

「そういえば、明日、絶対あの三人、モノレールでの戦闘について聞くよね。……………！よし、そうだ、そういうことにしよう。そうと決まれば、玖渚【くなぎさ】さんに頼もう。あの人なら簡単にできるだろうしね」

うん。我ながら良いアイデアだね。

てか、忘れてたけど冬花さん、起きてるかな。先にそっちに電話しよう。

カバンから携帯を出して電話をかけた。

5月9日 土曜日 後編（後書き）

どうでしたか？

テンポはかなり悪いとおもいますし桐条のキャラが既に壊れそうです。

今回も、誤字や脱字、おかしいところやアドバイス、質問等ありましたら、教えてください。お願いします。

次で第一章は終わりです。

5月10日 日曜日(前書き)

こんにちは、ベルです。

今回はとても長くなってしまいました。

そして遂に、名前だけ出てきたあの人たちの登場です。

5月10日 日曜日

〔視点：悔識〕

「おはよう、悔識。さっさと起きて。出かけるぞ」

「…あの〜。僕…まだ布団に入ったとこなんですけど」

「それが？今は朝9時よ」

「いや、だから、布団に入ってから5分くらいなんですけど」

「5分寝たなら十分でしょ。10分で準備しなさい。もう雀躍【じやくやく】は既に家の前でスタンバってるぞ」

「無理…って言っても無駄ですよ。わかりました。起きて準備します」

「それでいい。じゃ、5分後にな」

そう言い残して階段を下っていく冬花さん。

「はあ〜、わかりました」

短くなってるし。

結局、あの後、玖渚さんに電話したあと、冬花さん家に着いてみると、やっぱり二人とも寝てた。

電話しても全く起きないので、家の前で8時半ぐらいまでずっと待たされた。

どれだけ熟睡してたんだよ。

その後、自分にあてがわれた部屋に入って荷物を適当に整理して着替えもせず寝ようとしたときにこれだよ。

しんどすぎる。僕、なにかしたかな。

そう思いながらも玄関の扉を開ける。

すると、雀躍さんが朝一とは思えないテンションで話しかけてきた。

「おっはよ〜。今日はいいい天気だね。絶好の出かけ日和だよ」

元気いっぱいに話しかけてきた雀躍さん。背は神歌さんぐらいより少し高めで、髪はとても短く後ろからみると男にみえるかもしれないが、服装で女性であるとわかる。その服装は、上は白色のT・シヤツで前にハートを矢が貫いている絵柄がプリントされ、肩が出ているのでブラの紐が見えている。下はタイトジーンズの上にボトム地の膝上までのスカートをはき、靴はスニーカーを履いている。足がかなり長いのでタイトジーンズがかなり似合っている。というより正直、かなりの美人だ。

「おはようございます、雀躍さん。冬花さんも改めておはようございます」

「ああ、おはよう」

そう返してきたのは、冬花さん。こちらは、雀躍さんとは違い髪は背中まであるロングで、背はモデルなみで足が長い。なので、普通は地面にすりそうなほど長い白のフレアロングスカートのすそが丁度の長さになっている。靴はブーツだ。上は雀躍さんの色違いのうすい青色を着て、そのうえに黒色の薄手のジャケットを羽織っている。こちらもちかなりの美人だ。

「ところで、昨日はよく寝れなかったのか？目の下の隈がひどいぞ」

「ほんとだあ。悔ちゃん、夜更かし？悪い子だね」

「雀躍さん、その呼び方やめてくださいよ。それに、寝れなかったのはお二人が熟睡してたからでして。」

しかも一睡もさせずにお出かけたと言って準備させたからですよ」

かなり、眠いんですよ。しかし、冬花さんは悪びれもせず

「何を言っている？昨日、夕方には着くといっていたのに深夜に来たお前が悪い。しかも、携帯の番号を新しくしたなら知らせておけ。携帯も通じないおかげで、雀躍が『悔ちゃん、もしかしてウチで暮らすっての嘘だったのかなあ？』とバカのひとつ覚えみたに何回も言っていたぞ」

「ちよっ！、おねえちゃん！…そんなことあたし、いってないし。」

おねえちゃんこそ『あいつ、何故こない。電話も通じないし…！』もしかして、なにかあったのか？』なんていって曲識さんに電話しそうになつてたくせに」

雀躍さんは顔を赤くしながら冬花さんのことを言っている。しかし、

「ふん、あんな演技も見抜けないとは。雀躍、将来夫の浮気を見抜けないで苦労するぞ」

と何事もないように返している。浮気って、この2人ならたぶん、殺しても赦さないだろうな。

てか、まず、浮気しないだろう。2人ともかなりの美人なんだから。

「いいもん、おねえちゃんと違って、浮気しない人と結婚するから」

「それは、私に男を見る目がないと。ほう、言うようになったな雀躍。この前、男に振られたくせに」

うそ！もつたいない、こんなに美人でしかも楽しい人なのに。

「あれは、逆に振ったんだよ。あんな男こっちから願ひ下げだしてか、おねえちゃんだった…」

「まあまあ、そこら辺で終わりにしましょうよ。出かけるんでしょ？だったら、早く行きましょう」

このまま行くと、最後は凄いいことになりそうなので止めておこう。

「まあ、そうだな。雀躍どこに行こう？」

「今日はポロニアンモールじゃなくて、遠くの大型ショッピングセンターに行こうよ。悔ちゃんがいるからいくら買っても平気だし」

「そうだな。確かに悔識がいるしな」

「…まあ、そうなりますよね」

やっぱり、荷物持ちか。まあ、居候させてもらうのだから、しかたないか。

なんて思っていると、冬花さんが

「その前に、悔識。敬語は禁止だ。他人行儀すぎる」

「そうだよ、悔ちゃん。私たちの仲じゃない」

「いや、二人とも僕より年上なので、敬語で話しますよ」

「以前なら敬語でもよかったが、今は一緒の住んでいるのだぞ。なら敬語は無しだ」

「そうだよ。それに、年上って言うても一つじゃん」

そんなふうと言う二人。

「わかりまし…わかったよ。雀躍、と、冬花」

かなり恥ずかしい。顔が熱い。

「それでいい」

「なんで、あたしの名前はすつと言って、おねえちゃんのは恥ずかしそうに言うのよ」

「いや、それは…まあ、細かいことは気にしないで行きましょう」

「ところで、悔識。なんと呼べばいいのだ？もう零崎の名前は使わないのだから」

「え〜と…桐崎一輝でお願いします」

「一輝ってことは、かつちゃんだね」

「雀躍、お願いだから、その呼びかた、止めて」

「わかった、一輝。一応確認だが、私たちの苗字は神楽【かぐら】だからな」

「それも、わかってます」

僕は4月、この二人、罪口姉妹と京都に行ったときに殺人鬼をやめ、人間に戻ろうと決めた。そのときに2人に一緒に住もうと誘われたのだがその話は今は関係ないな。

そんなこんなで、向こうに着き、買い物をして昼食を取っている。正直、かなりしんどい。てか、二人ともかなり買っな。まだ、買うのか？

「昼、食べたらどうする？雀躍はまだ見たいところあるのか？」

「もう、ないかな。おねえちゃんは？」

「私もない。一輝、お前は？」

「僕はもともと見たいものないからね」

「なんだ、本当じゃないのか？」

「そうだよ、かつちゃん。なんか、あるでしょう？」

「雀躍、本当にやめて、その呼び方。…見たいものはないよ。それよりも眠りたい」

「…そうか。では、食べたら帰るか？」

「そうだね。ないなら…仕方ないね」

なんだ？2人とも本当は、なにか見たいのか？

「2人は本当じゃないの？」

「ない」「ないよ」

「じゃあ？なんでそんなに残念そうなの？」

「それは…え〜と。ね、おねえちゃん」

「このタイミングで私に振るのか、雀躍？…まあ、いい。実はな、2人でお前になにかプレゼントしようと思ってたんだ。けど、お前、なにも買おうとしないから」

なるほど。そんなこと思ってたのか。かなり嬉しい。

「そんなの別にいいよ。2人が住もうと誘ってくれたことが既にプレゼントだよ。でも、どうしてもっていうなら、頼みたいことがあるんだ」

「なんだ？」「なに？」

「前に言ったよね。不思議な現象のこと。昨日あることがあってね」

そこで、昨日のことの顛末を話した。

「零崎を始めるなんて、よっぽど溜まっていたのね」

「始めるつもりはなかったんだけどね。でも、おかげで人を殺さなくても、解消できたよ」

「かつちゃん、気をつけなよ。人じゃないやつ相手するなんて」

「それは…ごめん。気をつけるよ。で、ここからがお願いしたいことなんだ。今日その人らと会っただけど、零崎だと明かしたくないから、嘘をつくのに2人に付き合っしてほしいんだ」

「そんなこと、いくらでも付き合っぞ」

「あたしも、家族だからね」

「家族って、一緒に住んでるだけだよ」

「いや、私も弟みたいに思ってるぞ」

「でも、元零崎、元殺人鬼だ。…そんな奴を家族って」

「お前は元だろう。それに、他の零崎と違って罪悪感はずっとあった。罪悪感があるのは人間だけだ。そんな奴を殺人鬼とは言わない。お前は、今も昔も人間だ」

「そうだよ。かつちゃんは鬼じゃなくて人間だよ。そんでもってあたしの弟だよ」

「…本当にありがとう。雀躍、冬花」

こんな僕を人間だなんて。本当にありがとう。

その後、食べながら嘘の内容について話、そして帰った。

家に戻ると3時になっていた。

〔視点：なし〕

悔識たちが昼食をしていた頃、寮のラウンジにあるソファでテレビを見ながら、神歌、伊織が座っていた。

「それにしても、一輝だっけ、アイツほんとに何したんだろうな？」

伊織が口を開く。

「凄かったよね。気がついたら首が落ちてもんね。もしかしたら、シヤドウの左手も切ってたんじゃない？」

「それは、ねえだろ。そうになると、一人で相手してたことになるぞ」

「わからないよ。彼ならもしかするとありうるかも。ところで、今、何時？」

「今は、1時ちよっと過ぎだな。なになに、用事？」

「昨日、部活で今日の昼から、練習の相手頼まれちゃって」

「お前、朝行ってたろ？」

「そうだよ。でも、雀躍の頼みだからね」

こんな感じに、2人は話しをしていた。

そのころ、自室にいた桐条は電話をしていた。

〔視点：美鶴〕

「桐崎一輝という人物の情報がほしい。…ああ、どこで何をしていたか、全てだ。…わかった、わかり次第私のパソコンに送ってくれ。頼んだぞ」

本当になんなんだ、彼は。神歌や岳羽、伊織から聞いた限りではデタラメすぎる。

それに、転校届けもまだ出ていなかった。

とりあえずは、情報待ちだな。この分だと夜までには届くだろう。信用できるなら仲間にしたい。

〔視点：冬花〕

「あゝよく寝た。冬花さん、今何時ですか？」

そんなことを言いながら二階からおりてくる一輝。

「敬語」

「あつすいません。冬花、今何時？」

「今は、5時過ぎだな。晩ご飯まで、あと少しかかるぞ」

「いいよ。ありがとう」

本当に帰ってから寝てたな。すこし、ひどかったか？

「ところで、雀躍は？」

「あいつは、今は部活に行っている。今日は朝の分をサボったから
昼から友達に相手をしてもらおうよう頼
んだそうだ」

「部活？」

「そう部活だ」

「何の？」

「薙刀部、だそうだ」

「あゝ、だから相手が必要なんだ」

と言う一輝。

「それより、あんな壮大な嘘で大丈夫なのか？」

昼ご飯のときに聞いた嘘の内容は現実味がなさ過ぎる。

しかし、一輝は自身満々に

「大丈夫だよ。玖渚さんにも頼んだし。まず、ばれることはない
と思うよ」

「そうか。ならいいんだが」

その後は会話もなく、私は野菜を切ったり、魚を切ったりしていた。
すると急に少しためらいながら聞いてきた。

「あのさ…寝てたとき…どうだった？」

「…お前はどんな夢をみたんだ？『冬花、僕に全身を預けて』とはどういうことだ。…っ！まさか！お前、私のことを」

「そんな冗談はいいよ。本当は？」

「……ひどくうなされていたぞ。まだ、治ってなかったのか？」

「…やっぱり…そうなんだ。ごめん。うるさかったよね」

「そんなこと気にするな。それより、大丈夫なのか？初めて人を殺した時からずっとなんだろう？」

「なんで知ってるの？」

「双識さんが教えてくれたんだ。お前は伝えないだろうからって」

「あの変態兄さん、余計なことを」

「で、本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ。もう慣れたからね。ただ、本当にうるさいよね。」
「めん」

「だから、気にするな。きっとあいつもうるさいとは言わない」

「…本当にありがとう」

「なにか、して欲しいことはあるか？」

「いや、ないよ。ありがとう」

「そうか。なにか、あれば言えよ。家族だからな。…そろそろ、あいつも帰ってくる。皿、出してくれ」

「わかった」

本当に大丈夫なのか？京都旅行のときもひどかったが、なんとか出来ないものだろうか。

〔視点：なし〕

現在、7時25分。

「じゃ、そろそろ、行ってくる」

悔識はギターケースを肩にかけ、玄関で二人に向かって言った。

「ああ。あまり遅くなるなよ。最近、無気力症という意味不明な病気がはやってるからな。あと一応、鍵は持っていけよ。また、締め出しをくらうぞ」

「そうそう。あたしたち、寝るの早いから」

「大丈夫、持ったよ。じゃあ…行ってきます」

『行ってらっしゃい』

悔識が恥ずかしそうに言うと二人は笑顔で見送った。

「そうそう、おねえちゃん。かつちゃんへのプレゼントの件だけど

「なんだ、雀躍。なにかいい案があるのか？」

「こづいづのはどうかな？」

2人は話をしながら家に中に戻っていった。
外に出ると悔識は桐条に電話をかけた。

「もしもし、桐崎ですが」

「君か。今は何処だ」

「北辰巴ポートアイランドに向かっています」

「よし、わかった。モノレールに乗って巖台駅の改札を出たら、電話してくれ」

「わかりました」

電話を切ってモノレールに乗って、巖台駅についた。
すると、赤い髪をした女性が悔識に手を振っている。
悔識は不振に思いながら、その女に近づいた。

「あなた、誰ですか？」

「私が桐条美鶴だ。驚かせてすまない、桐崎一輝君。わかりづらい
といけないから迎えにきた。ほら」

そう言って。桐条は悔識にヘルメットを渡す。

「どうして、僕だとわかったんですか？」

「それも含めて、寮に着いたら話そう」

そう言って、バイクにまたがり、エンジンをかける。

悔識は戸惑いながらもバイクの後ろに乗った。

「着いたぞ。ここが、特別寮だ」

「あの…ありがとうございます。迎えに来ていただいて」

「気にするな」

そう言って、扉を開ける。

「お邪魔します。…あれ？誰もいない」

「みんなは4階の部屋にいる。こっちだ」

そう言って前を歩く桐条の後ろについていく。

4階の部屋に入ると、理事長も含めたSEESの全員が座っていて桐条が悔識をソファに誘導し自分も真田の横に座った。

伊織―神歌―岳羽

幾月―テーブル―悔識

真田―桐条―

「桐条君、ご苦労さま。まさか、君が迎えにいくとはね」

「いえ、呼び出したのは私でしたし、確認したいこともありましたから」

「そう…で、どうだった？」

「心配ないです。襲ってくる気はないようです」

桐条がSEESの顧問、幾月修司【いくつきしゅうじ】に向かって答えると、岳羽が

「ちよっ、先輩、襲うってどういうことですか？」

と、疑問をぶつける。

「そうか、みんなは知らなかったな。桐崎、すまないが君の過去を調べた。10年前…海外旅行中に傭兵集団<リベリオン>に拉致され、監禁されていたことも含めてだ」

「…別にいいですよ。どうせ…話そうと思ってましたから」

悔識は無表情で答える。

「傭兵集団に拉致って、どういうことですか？」

神歌が驚きの表情で言う。

「そのままの意味だよ。僕は。十年前、旅行先でテロに遭い、両親を殺された。その時、テロ集団に雇われていた傭兵の一人が僕を誘拐したんだ」

「うそ…」

「マジかよ」

悔識の言葉に各々が驚きの一言を言う。

「…そうだね。先に僕の話をしようか。奴らが誘拐してくるのは性別は関係なく全てこどものみ。その中で生きるには、あいつらを面白がらせたり、奉仕したりしないといけないかった。飽きられたら最後、銃で撃ち殺されるか獣の餌にされるかのどっちかだった。だから…必死で色々なことをした。…そんな地獄みたいな日々が続いたある日、奴らの一人が僕に興味を持って言った。『こいつを新作の武器の実験台にしよう』ってね」

神歌や岳羽は聞きたくないみたいに顔を手で隠し、下を向き伊織、真田は苦しそうな顔をしている。

「桐崎。つらいなら、やめてもいいぞ」

桐条が気遣って言う。

しかし、悔識は無表情で続ける。

「いえ、大丈夫です。その後は本当の地獄だった。よくわからない薬を打たれたり、体中に電気を流されたりと最悪だった。そんな中で死にたいと思っていた時、一人の武器商人が来て僕に興味を持った。そして、僕と武器を交換したんだ。その後もあんな日が続くと思っていた。けどその人が『復讐したいか?』と聞いてきた。もちろん、僕は復讐したかった。それからはその人にいろいろなることを教わった。銃の撃ち方、ナイフの振り方、爆弾の作り方なんかをね。

でも、結局、復讐は果たせなかった。その人が別のところに武器を売りにいった時、死んだんだ。僕に残ったのは戦闘の技術だけだった。どうしていいか…わからなかった」

「それで…お前はどうしたんだ？」

悔識が話しを区切ると続きを真田が続きを促した

「その後は何もしなかった。ゆっくりと死ぬのを待ってた。すると、あの人の娘っていう人がやって来てこう言ったんだ。『ごめんね、遅くなって。迎えに来たよ』ってね。訳が分からなかった。でも、その人を見た瞬間、救われた気がした。僕は生きていけると思った。それからその人の家で暮らすことになったのが今年の4月。ここには、引越してきたんだ。その人が家族が増えたからってね。まあ、僕は一ヶ月ぐらい病院や警察とかでいろいろ聞かれて遅れたけどね」

「…つらいことを言わせたな」

真田が申し訳なさそうに言う。

「いえ、もう昔のことです。なので、襲うかもという危惧もわかりません。それに結果的に悪いことばかりでもありませんでしたしね。たとえば、これとか」

そういつて席から立ち上がりギターケースのジッパーを開ける。

「それって、昨日使ってた」

神歌が顔を上げながら呟く。

「そうだよ。どちらも、その武器商人が作ってくれたものだよ」

そう言っつて、自己嫌悪を左手で持って構えた。

「桐条さん、そのテーブルの端になにかおいてください。昨日したことをお見せします」

「わかった。伊織、君のそれ、置いてくれないか？」

「わかりました」

言われた伊織は飲み終わったジュースの缶をテーブルに置く。

「あと、岳羽さん。昨日の治療？みたいなのお願いします」

「えっ…でもそれ使った後、ひどくしんどそうだったよ。別に今しなくてもいいんじゃない？」

「いえ、説明するより、見せたほうが早いですから。では、行きま
すよ」

そういつて右手で自己嫌悪を引き抜いたようにみえたが、昨日と同じで姿がぶれただけだった。

しかし、缶は横に五分分にわかれていた。

それを見ていた全員が暗い顔から驚きの表情の変わっている。

悔識は片ひざをついて、しんどそうにしている。その全身には所々火傷のようになっている。

それを見て岳羽が悔識に駆け寄りながら召喚する。

<ガウン>

「イオ、お願い、治してあげて」

イオがディアをかけると悔識は少ししてから立ち上がった。

「ありがとうございます」

岳羽はそれを聞いて安心した顔をしてもとの場所にもどった。それと同時に啞然としていた真田、桐条が聞いた。

「今、何をしたんだ？」

「姿がぶれただけだったぞ」

「この刀、実はこの二本の鎖で大気中の静電気なんかを集めてるらしいんです。そして、このトリガーを引いている間は全身に電気が駆け回って、普段の7倍近くの速さで動けるんです。でも、かなりの電気が流れるので、体中は軽い火傷みたいになるし、筋肉は普段よりも酷使されるので二回か、長く流していると一回も使うと動けなくなります」

それを聞いた桐条が心配そうな顔をして忠告する。

「桐崎、これを使うことはもうやめたほうがいい。いくら岳羽の回復があっても、万能ではない。死んだら治らないんだ」

「大丈夫ですよ。僕の体は、薬でおかしくくらい丈夫なんです。これくらいの電圧に耐えられるくらいにね。そして、こっちはただの鉄板ですが。そうですね、伊織さん、持ってみてください」

説明しながら自己嫌悪をギターケースにしまい、狂気感慨が見える

ようにしながら伊織をよんだ。

呼ばれた伊織は、まだ驚いていたが、立ち上がり、ギターケースから狂気感慨を取り出そうとした。しかし、

「うお！なんだ！これ…ダメだ、全くもちあがらねえ」

「うそだろ。順平、貸してみる」

伊織が取り出せないのを見て真田は自分がやると言い出した。

「…っ！なに！…なんて重さだ。びくともせん」

「ね、オレの言ったとおりでしょ」

真田は顔を赤くしながら持ち上げようと必死に力を入れるが持ち上がることはなかった。

しかし、悔識は左手でそれを軽々取り出す。

「なっ！」「うそだろう！」

伊織、真田はそろって驚愕の声をあげ、他の人はただ呆然とするだけであった。

「これは、この薄さで90キロぐらいあるそうです。ちなみに、ギターケースも武器商人が作ってくれたものなので破れることはありません」

「90キロだと！」

「はい。90キロです」

悔識は何事もなく言う。

真田は当然の疑問を口にする。

「お前は…なんで持てるんだ？しかも、片手で」

「これも、薬の影響で筋肉が異常に発達してるんです」

伊織、真田はそれを聞いた瞬間、しまったみたいな顔をしてソファに戻った。

その後、桐条が話始めた。

「疑ってすまなかった。…ひとつ、言うておくことがある」

「なんですか？」

「10年前、君を誘拐した傭兵集団、<リベリオン>は半年前、何者かに潰されたらしい。…こんなことを知っても君の気が晴れることはないと思うが伝えておく」

「…そうでしたか。潰れましたか。…教えていただき、ありがとうございます」

一瞬、悔識の顔が驚いたふうになる。

「昨日は悪かったな。そんな過去があるなんて知らなかったから、しつこく聞いて」

「私も、ごめんなさい。」

「いいんですよ。本当に昔の事ですから。今は家族もいますしね」
伊織、神歌が謝ってきたことに対して明るく答える悔識。
それを、見て桐条が口を開く。

「それでは、昨日のことを説明しよう。いきなりでなんだが、君は一日が24時間ではないと言ったら、信じるか？」

「それは、每晚12時すぎにおきる現象のことですよね」
答えながら、悔識はソファにもどり、狂気感慨をギターケースに仕舞わずに自分の横に置く。

「そつだ。あれは”影時間”…一日と一日の狭間にある隠された時間だ。ところで、君は影時間をいつから体験している？」

「え〜と、薬を打たれたした頃くらいです」

「やはりそうか。なら。影時間についてどれくらい知ってる？」

「人が棺みたいになる。機械がとまる、くらいです。あの怪物のことは知らないです」

「それだけ、知っていれば話はやい。我々は怪物を”シャドウ”と呼んでいる。奴らは影時間に生身でいる人の精神を喰らう。襲われれば、たちまち生きた屍だ。君も聞いたことがあるんじゃないのか。原因不明の無気力症というのを」

「ちょっと待ってください。生身でいる人を襲うって、僕は襲われたのは昨日が初めてですよ」

「…シャドウはここら辺にしかいないし影時間に耐性のある人を外では襲わない。だから、君は今まで襲われることはなかった」

「怪物についてはわかりました。では、岳羽さんや伊織さん、神歌さんから出てきた別の怪物みたいなものはなんですか？」

「あれは”ペルソナ”といって、奴らに唯一対抗できる力なんだ」

「ペルソナ？」

「ごく稀に影時間に自然に対応できる人がいる。…君の場合は薬などで偶然に影時間への耐性が出来たみたいだがな。そして対応できる人はペルソナを召喚できる可能性がある」

「そんな人口的に耐性をつけることができるんですか？」

「…理論上は可能だ。ただし、体への負担が大きい。なので、普通はしない」

「はあ。…だいたい分かりました」

「理解が早くて助かる」

「それで、僕は…何をされるんですか？」

その時、悔識は狂気感慨を手に持ちソファから離れた。その眼にはさつきまでと違い、敵意が籠もっていた。その場の全員に緊張が走る。

「勘違いしないでほしい。君に危害を加える気はない。逆に仲間になって欲しいんだ」

「どういうことだ？」

悔識がまだ敵意をむき出しにしながら言う。

すると、幾月が笑みを浮かべ、トランクを出しながらいう。

「我々は“特別課外活動部”。表向きは部活って事になってるけど、実際はシャドウを倒す為の選ばれた集団なんだ。部長は、桐条美鶴君。僕は、顧問してる。…そういえば自己紹介がまだだったね。僕は月光館学園の理事長の幾月修司。イ・ク・ツ・キ、言いくいだろう、自分でも嘔みそうだよ。他に、面識のない人は…真田君ぐらいかな？」

「美鶴と同じ高3の真田明彦だ。そう、警戒するな」

真田がそういったあと幾月がトランクを開ける。

中には、召喚機と腕章が入っていた。

桐条がそれを見て話し出す。

「君は昨日、ペルソナを召喚したそうだな。さっきも言った通りペルソナを召喚できる人は少ないんだ。だから、君にも仲間になって欲しい」

桐条が言い終わると、悔識は少しずつ警戒を解いた。

「本当にそれだけか？」

「ああ。それだけだ」

「…わかりました。信じます。疑ってすいませんでした」

「ありがとう」

悔識が狂気感慨を降ろし、ソファに座るのを見てその場の全員が安堵した。

すると急に悔識が神歌にたいして言った。

「そういえば、雀躍さんが神歌さんによろしくとってしていました」

「えっ、なんで雀躍のこと知ってるの？」

「だって僕が住んでるの神楽家ですよ」

「えー！じゃあ、さっきの武器商人の娘って…」

神歌だけでなく、岳羽、伊織もおどろいている。

「雀躍さんの姉の冬花さんです」

それを聞いた神歌は納得したように言う。

「だから、今日、上機嫌だったんだ。まさか、彼女が武器商人の娘だったなんて」

そこに真田が質問する。

「雀躍というのは誰だ？」

「オレらと同じクラスメイトで神歌と同じ時期に転校してきた人っす」

真田はそのことをきくと納得したような顔をした。
すると桐条がある疑問を口にする。

「ところで、桐崎。君はいつ月光館学園に転校してくるんだ？まだ、転校届けは出ていないぞ」

「それは、明日出すつもりです。なので、来週の月曜くらいからだ
と思います」

「そうか。わかった。最後に君にはこの寮に入ってもらいたいんだ
が」

「それは、嫌です。やっと出来た家族なんです」

「しかし、もしもの為に」

桐条が説得しようとした時、幾月が言葉を遮って発言する。

「いいじゃないか、桐条君。彼はやっと普通の生活が出来るようになったんだ。」タルタロス”の探索の予定を事前に伝えておけばいい」

「…わかりました。神歌、君が伝えておいてくれるか？」

「いいですよ。じゃ、桐崎君、携帯貸して」

そういわれ、悔識が携帯を渡すと神歌は自分の携帯も出してアドレ

スに登録しにかかる。

神歌が携帯をいじっているあいだに悔識は、

「タルタロス？」

「言ってみれば、シャドウの巣みたいなもんだ。俺達のスキルアップにはうってつけの場所だ」

「明彦、お前はまたそんなことを」

「？」

「…説明するより実際に見たほうが早いだろう。向こうに行ったら説明する」

「はあ、…わかりました」

悔識は訳がわからないみたいな顔をしながらも了承の意を伝えると神歌が

「はい、ありがとう。アドレス登録しといたからね」

と言って携帯を返す。

それを受け取ったあと、トランクの中の召喚機と腕章、自己嫌悪をギターケースに仕舞う。

それを見ていた神歌や真田、幾月、伊織、岳羽が言う。

「仲間になってくれてありがとう。これからよろしくね」

「さっきはつらい話を話させてすまなかった。これからよろしく頼

む

「本当に君が参加してくれてうれしいよ。ちなみに、僕はペルソナ出せないからね」

「わからないことがあったら、ペルソナ使用の先輩であるオレに聞けよ」

「あんだねえ。桐崎君、こいつにだけは聞かないほうがいいよ」

「ちよっ、ゆかりっち、オレの扱いひどくね？」

4人の会話を聞き、笑いながら悔識は聞く。

「「こちらこそ、よろしくお願いします。えと、これで話は終わりなら、帰っていいですか？」」

「ああ。帰りも駅まで送ろう」

「ありがとうございます。ですが、帰りは道を覚えているので大丈夫です。ところで、桐条さんのバイクについている変な機械はなんですか？」

「あれは、影時間中でも動くようにするためのものだ。なんだ、桐崎、君は免許を持つてるのか？」

「いや。まだとれる年齢ではないんですが…運転は出来ます。なので、ここに来るのにあれば便利だなあと」

「そうか…理事長、許可しても大丈夫でしょうか？」

「そうだねえ…桐条君、彼に今から運転させて決めたらどうだい？」

「えっ…わかりました。桐崎、ではいくぞ」

「わかりました」

2人はそう言うのと作戦室から出ていった。
残されたみんなは話だす。

「それにしても、焦ったなあ。オレ、昨日のモノレールよりも焦ったぜ」

「それだけ、監禁中につらい思いをしたってことでしょう」

「そうだよな。しかも話すとき、ずっと敬語だし。てか、なんか、桐条先輩、桐崎君に優しくなかった？」

「あ、オレもそう思った。麻里っちは？」

「私も。なんか、いつもと違うよね」

「そうか、美鶴はいつもあんな感じだと思っが」

「いや、絶対おかしいっすよ。妙に甘いつていうか、気を遣ってるっていうか」

4人がそんなふに話をしていると、幾月が

「君らは知らなかったね。…昔、桐条君に桐崎君と同一年の弟がい

「ただ」

「いたんだってどういうことですか？」

幾月の言葉に神歌が反応する。

「…彼女の弟は10年前、突然いなくなっただ。なんの痕跡も残さずね。そして、桐条の力をもってしてもその行方はいまだわかっていない」

「私、そんな話、知らなかった」

幾月の言葉に驚きを隠せず言う岳羽。他の3人も同じような表情をしている。

「そうだろうね。しかも、その弟の名前が彼と同じ一輝なんだ。多分、弟と桐崎君がダブって見えたんじゃないかな」

そう言うと4人は納得したような顔をした。

そのころ2人は寮の前にいた。

「ほら、鍵だ。無理するなよ」

「ありがとうございます」

悔識は桐条から鍵を受け取るとバイクにまたがり、ヘルメットをしてからエンジンをスタートさせた。

そして悔識は10分くらい寮の前をひとしきり走り、桐条のところの戻った。

「確かに、上手いな。だが、公道でウィリーはないだろう」

「すみません。久しぶりなもので、つい嬉しくて」

「バイクが好きなのか？」

「…監禁されていたときに覚えた芸の中で一番好きです」

「……………わかった。バイクを買ったら持って来るといい。機械をつけよう」

「本当ですか！ありがとうございます」

「久しぶりなら駅まで乗るか？」

「えっ…でも、その後このバイクどうすれば」

「私がお前の後ろに乗れば問題ない。どうする？」

「本当にいいんですか？今日、会ったばかりの僕の後ろに乗って？」

「ああ。何故か君を見ると安心するんだ」

「…でも、ギターケース、背負えますか？」

「…無理だな」

「ですよ。やっぱりいいです」

「…なら、送ろう。もう、時間も遅いからな」

「…お願いします」

悔識は行きと同じように桐条の後ろに乗って駅まで送ってもらった。

〔視点：悔識〕

「嘘がばれなくてよかった。今度、玖渚さんにお礼しないと」

僕は北辰巳ポトアイランドから神楽家に向かいながら考えている。想像以上だ。ただ、嘘の効果が効きすぎてるような気がするけど、まあいいか。ばれるよりはマシかな。

でも、流星に敵意をむき出しにして警戒するのはやりすぎた。

「それに、まさか、姉さんの後ろに乗れるとはね。それにしても、美人だったな」

これも想像してた以上だ。でも、まさか怪物と戦ってたなんて、思いもなかったよ。

バイクに乗るのも久しぶりだったし、本当によかった。バイク、なんとかして買わないとね。

あつ。そういえば、お金返してもらったの忘れた。次、返してもらおう。

「今日も2人とも寝てるんだろうな」

そんな風に思いながら僕は歩いていった。

家に着くとまだ2人とも起きていて、なんだか嬉しそうな顔をしていた。

なんなんだろう？

その後、2人に今日の事を話してから寝た。

〔視点：美鶴〕

桐崎を送り届けた後、私は自室に戻り今日の事を考えている。

「それにしても、何故あいつを見ると安心するんだ？」

初めて会ったばかりなのに。…まあいい。新しい仲間が加わったのだ。

それも、かなり腕の立つ。

「それにしても、あそこまで警戒するとは」

よほど、監禁の時につらい思いをしたのだろうか。

でも、どこことなく、一輝に似てたな。

まあ、気のせいだろう。桐崎があいつなわけがない。

本当にお前は何処に行ったんだ、一輝。

5月10日 日曜日(後書き)

どうでしたか？

かなりグダグダ感があると思いますが、そこはどうかお見逃しください。

また、桐条のキャラを保てなくなってきました。その点もお見逃しください。

次回は設定を書くつもりです。

今回も誤字・脱字、おかしなところやアドバイス等ありましたら教えてくださいるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8332x/>

零崎悔識の人間帰属

2011年11月3日02時06分発行